

(中間評価)

世界で活躍できる研究者戦略育成事業 (実施期間：令和3年度～令和12年度)

プログラム名：大学×国研×企業連携によるトップランナー育成プログラム (TRI STAR)

代表機関：筑波大学（総括責任者：永田 恭介）

共同実施機関：茨城大学、お茶の水女子大学、産業技術総合研究所、農業・食品産業技術総合研究機構、物質・材料研究機構、情報・システム研究機構国立遺伝学研究所、株式会社アーク・イノベーション、株式会社トヤマ、株式会社日本政策投資銀行、関彰商事株式会社、日本アイ・ビー・エム株式会社、ファイメクス株式会社（令和5年度まで参画）

取組の概要

本事業では、企業との人材育成文化の共有等、日本の研究環境上の課題克服に向け、産・官・学、言語、分野、業界、業種等のあらゆるボーダーを「突破する力」と「表現する力」を涵養した「世界と繋がるトランスボーダー研究者」を育成するために、トランスボーダーに挑戦してきたポテンシャルに満ちた地域「つくば」を起点とし、大学×国研×企業との協働により文理の壁も超えた世界を先導する育成プログラムの開発と実証を行う。

上記の人材育成の目的を達成するために、「大学×国研×企業連携によるトップランナー育成」コンソーシアムを設置し、コンソーシアム協議会とプログラム強化委員会を置き、段階的にトランスボーダー型の人材育成を図る。その上で、大学・国研・企業の連携体制の構築、参画大学間の連携体制の構築、参画機関所属研究者間のマッチングの仕組みの構築、育成対象研究者の研究の自由度の確保と大学・国研・企業の有機的連携の仕組みの構築、トランスボーダー育成対象者のフィードバック体制の構築等を行う。

筑波大学が進めてきた国際的な研究者育成システムである「国際テニュアトラック制度」の実績を活かし、自身の専門性の追求の先に、「俯瞰力」「マネジメント力」を涵養し、分野の壁、組織の壁を突破する「トランスボーダー型次世代PIの育成」を目指す。また、育成対象研究者のみならず実施機関に所属する研究者の研究環境を世界最高水準に引き上げる「トップレベル研究環境実現」を目指す。

(1) 評価結果

総合評価	進捗状況 (全般)	進捗状況 (事業運営 体制の構築)	進捗状況 (研究者育 成プログラ ムの開発、 実証、普 及・拡大)	進捗状況 (研究者育 成体制の構築)	進捗状況 (支援対象 研究者のサ ポート)	今後の進め 方と取組の 継続性・発 展性
A	b	a	a	a	a	a

総合評価： A（概ね優れた水準にある）

(2) 評価コメント

自らの専門性の先に、分野や業種などの壁を越えた共創を生み出し、新たな研究の流れを創出

できる「トランスボーダー型研究者」の育成という理念が明確であり、国際性・学際性・産学連携を一体的に推進している。筑波大学を中核として、茨城大学・お茶の水女子大学に加え、国立研究開発法人及び大学共同利用機関（以下「国研等」という。）・企業を巻き込み、つくば地区の強みを活かした大規模コンソーシアムを構築し、参画機関の関与が着実に拡大している点は評価できる。

一方で、様々な取組が実施されているものの、筑波大学が実施している他事業の取組と類似するものが多く、「トランスボーダー型研究者」の育成のためには、国研等や企業との連携体制や、学内環境の構築を含めた画期的な取組の開発が求められる。また、本事業の目的である「世界で活躍できる研究者の育成」に向け、国際性の一層の強化が期待される。

令和8年度以降の事業運営においては、各取組の定性的・定量的な成果に焦点を当て、事業内で生まれた成果とその評価方法を明確化し、事業を推進していくことを期待する。

・**進捗状況（全般）**：「トランスボーダー型研究者」の育成という理念が明確であり、国際性・学際性・産学連携を一体的に推進している点が評価できる。育成対象者の認定数は所期の目標を達成しており、参画企業数も拡大している。しかし、事業目標達成に向けてプログラムの開発が順調に進捗しているかの観点に照らすと、クロスアポイントメント制度等の活用による国研等・企業との連携を活かしたキャリアプランの構築は不十分であり、また、シンポジウムや交流会などの取組も他事業と大きな差異が見られない。「トランスボーダー型研究者」の育成という目的を達成するには、より踏み込んだ実施形態をとる必要がある。

・**進捗状況（事業運営体制の構築）**：コンソーシアム協議会の下に、3つのワーキンググループ(WG)を含むプログラム強化委員会が形成されており、アドバイザーボードが大学・国研等・企業などの共同実施機関、連携機関から構成されている点は評価できる。一方で、この連携を生かした組織的な共同研究には至っていないことから大学外のアドバイザーボードとWG1（トランスボーダー人材支援WG）との間で適切なコミュニケーションが確保されていたかについては疑問が残る。また、国研等・企業側が本事業に参画するメリットが、研究者間の交流及び研究シーズに触れられることという近視眼的なものとなっており、将来的には企画が定型化する恐れがあるため、「トランスボーダー型人材育成」の観点から国研等・企業側が継続的に参画する意義を見出す必要がある。

・**進捗状況（研究者育成プログラムの開発、実証、普及・拡大）**：トランスボーダーサイエンスキャンプ、海外渡航支援、次世代PI養成講座など多面的なコンテンツを開発し、体系的な取組を展開している点は評価できる。国研等・企業との共同実施イベントは、大学や教員が博士課程学生のキャリアパスを構築する上で有意義であり評価に値する。今後は、異分野・異業種のクロスオーバーやトランスボーダーでの取組が持つ本質的な価値・強みが、フェローにどのような変化をもたらしたのかを、より深く検証することが期待される。

・**進捗状況（研究者育成体制の構築）**：優れた研究者をフェローとして選定し、専門が異なる場合でも交流の機会・環境を提供している。令和6年度からは人文社会系アドバイザーを加えるなど、分野や男女のバランスを考慮した体制整備を進めており、多角的な視点からの研究協働が期待できる。定量・定性的な評価については、フレームワーク自体は評価できるものの、フェローが具体的にどのような成長や変化を遂げたのかを把握できる評価項目の再検討が必要である。

・**進捗状況（支援対象研究者のサポート）**：URAによる伴走・研究時間の確保が達成されており、

当初計画のとおりのかみ細かなサポートが実施されている。今後はポストフェロー制度の導入やキャリアアップに関する実績の創出に期待したい。また、コンテンツのうち最も費用を要している研究紹介プロモーションビデオ制作については、その効果や、成果がどのように事業目的に寄与しているのかを検証する必要がある。

・**今後の進め方と取組の継続性・発展性**：普及に向けて必要経費を試算し、事業終了後を見据えた検討が進められている。資金面では、既に民間からの寄附金を得ており、外部資金獲得による間接経費の学内調整にも期待できる。一方で、共同研究やクロスアポイントメント制度等を利用した国研等・企業との実質的な連携による「トランスボーダー型研究者」育成の仕組みの確立及び、その維持方法が重要となる。筑波大学だからこそ達成しうる発展性に期待したい。